

シュンペーター『**経済発展の理論**』Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung [1912→1926=1977]塩野谷祐一／中山伊知郎／東畑精一訳、岩波文庫（上・下）

目次

- 第一章 一定条件に制約された経済の循環
- 第二章 経済発展の根本現象
- 第三章 信用と資本
- 第四章 企業者利潤あるいは剰余価値
- 第五章 資本利子
- 第六章 景気の回転

第二章 経済発展の根本現象

■ 内発的革新

・「経済の与件の変化やこの変化に対する経済の漸次的適応に依存しているにすぎない」変化は、「経済発展」とは呼ばない。(174)「ここでは人口の増加や富の増加によって示されるような経済の単なる成長も発展過程とはみなされない。」(175)「質的に新しい現象」ではないからである。

・【**内発的に均衡点を動かす**】:「われわれが取り扱おうとしている変化は経済体系の内部から生ずるものであり、それはその体系の均衡点を動かすものであって、しかも新しい均衡点は古い均衡点からの微分的な歩みによっては到達しえないようなものである。郵便馬車をいくら連続的に加えても、それによって決して鉄道をうることはできないであろう。」(180)

・【**革新は生産側が主導する**】:「経済における革新は、新しい欲望がまず消費者のあいだに自発的に現われ、その圧力によって生産機構の方向が変えられるというふうに行われるのではなく、…むしろ新しい欲望が生産の側から消費者に教え込まれ、したがってイニシアティブは生産の側にあるというふうにおこなわれるのがつねである。」(181)

・【**五つの新結合**】: (1)新しい財貨、(2)新しい生産方法、(3)新しい販路の開拓、(4)原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得、(5)新しい組織の実現(独占的地位の獲得やその打破)。(183)

■ 「貯蓄と勤勉」から「転用と信用」へ

・「通例の資本形成の理論に含まれている純粹経済的発展理論の初歩においては、つねに貯蓄と勤勉が論じられているにすぎず、またこれに関連して、つねにこれらに依存して現れる年々のわずかな投資の増大が論じられているにすぎない。その議論は誤りではないが、それは本質的なことがらを看過している。…たとえば過去五十年間の世界経済の外貌を変化させたものは、貯蓄や利用可能な労働量の増加そのものではなくて、その転用にほかならなかったのである。」(186)

・「進行している発展」の「ほとんど大部分は、本来の意味における貯蓄活動から生じたものではなく、すなわち一般に年々自由に処分しうる消費基金とみなされる収入のうちの非消費部分から生じたのではなく、積立金から」生じた。(193-194)→発展の目的のための別

の貨幣調達方法、すなわち「信用」（銀行による貨幣創造）によって生じた。(195)

・【**無からの創造**】：「つねに問題となることは、すでに従来からだれかの手もとに存在していた購買力を移転することではなくて、無から新しいものを創造し、これが従来から存在する流通に参加することである。新しい購買力を創造するための信用契約が、それ自身流通手段ではないなんらかの実体的担保に基づく場合にも、同じように無から創造されるといわねばならない。そしてまさにこれこそが新結合の遂行のための典型的な金融の源泉」である。(195-196)

・【**銀行家の機能**】：「銀行家はたんに『購買力』という商品の仲介商人であるのではなく、またこれを第一義とするものでもなく、なによりもこの商品の生産者である。…彼はいわば私的資本家たちにとって代わり、かれらの権利を剥奪するのであって、いまや彼自身が唯一の資本家となるのである。彼は新結合を遂行しようとするものと生産手段の所有者とのあいだに立っている。…彼は新結合の遂行を可能にし、いわば国民経済の名において新結合を遂行する全権能を与えるのである。彼は交換経済の監督者である。」(197-198)

■ 企業者の定義

・「われわれが企業(Unternehmung)と呼ぶものは、新結合の遂行およびそれを経営体などに具体化したものことであり、企業者(Unternehmer)と呼ぶものは、新結合の遂行をみずからの機能とし、その遂行に当たって能動的要素となるような経済主体のことである。」(198-199)

・「経営体を所有していること、あるいは一般になんらかの「財産」を所有していることは、われわれにとって本質的な特徴ではない。」「『工場主』、『産業家』、『商人』…でさえ、必ずしも『企業者』であるとは限らないのである。」(200)

・「循環においては、企業者は利潤も得なければ損失も蒙らないのである。すなわち、彼はそこではなんら特殊な機能をもたず、彼は企業者としては存在しない。」(202)

・「利子を受け取る代わりに利潤に参与するからといって、『資本家』がただちに『企業者』になるわけではない。」(203)

・「危険を負担するものはつねに資本家だけである。企業者はしばしば資本家として危険を負担することがあるというにすぎない。」(203)

・「新結合の遂行は、これをおこなう人を概念的に純粋に特徴づけるような生涯の職業とはなりえない」(205)。

・マーシャル学派は、企業家の機能を「単純に最も広い意味での『経営(management)』と同一視する」が、このように定義すると、新結合の遂行という特徴は、「多くの日常的事務管理の中に埋没」してしまうことになる。(205-206)

・「だれでも数十年間の努力を通じてつねに企業者のままでいることは稀であって、これはちょうど、どんなにわずかであっても、なんらの企業者的要因ももたない実業家の存在が稀であるのと同様である。それはちょうど、どんな研究者でもたえず新しい精神活動に従事しつづけることはないが、だれでもその全学究生活の中で、どんなに小さなものであっても、なんらかの自分自身の創造をおこなわないものはないのと同様である。」(207-208)
→[メモ]ただし「小さな創造(新結合)」は、シュンペーターのいう企業者の機能とは異なるだろう。

■ 慣行とその外部

・「慣行の循環においては、各経済主体は自分の地盤を確信しており、自分の関係せざるをえない他のすべての経済主体の循環に適合した態度によって支えられており、またこれらの経済主体も再び彼に対して慣行の態度を期待しているために、迅速かつ合理的に活動することができるのに反し、彼が非慣行の課題に直面したときには、このようにむぞうさにおこなうことはできない。」(210)

・『『最善の方法』とは『経験的に検証された周知となっているものの中で最も有利なもの』と考えられなければならないが——もしこのような制限をつけなければその概念は無意味なものとなり、われわれの解釈に基づいて明らかとなる諸問題はまったく未解決のまま残されることになる——、しかしそのときどきに『可能なもの』の中で『最善のもの』ではない。したがって結局のところ、新結合は原則的には旧結合と並んで現われるという解釈そのもののみが事実適合するのであって、旧結合がみずから変容し、自動的に新しいものになるという解釈は妥当しない。」(213-214)

・「もちろん小さな変動であっても、時間とともに累積すれば大きな変動になることがある。しかしここで決定的な点は、経済主体がこれを企てる場合、彼はけっして慣行の基礎から離れないということである。これは小さな変動に関するかぎり通例であり、大きな（一回限りの大きな）変動の場合は例外である。」(214)

・「すべての人々は日常問題を伝統的な形式において認識し、処理しており、通常は自然にその解決に達するのである。『上役』といえども部下の場合と同じように月並みの仕事を持ち、彼の監督の機能も実はそのような月並みの仕事にすぎず、たんに個々の誤りを訂正する程度にすぎない。」(221)

・「ひとたびわれわれが獲得したあらゆる認識や行為慣習は、…われわれの人格の他の要素と固く不可分に結びつき、われわれのなかに根をおろしている。それらはそのたびごとに更新されたり意識されたりする必要はなく、既存の潜在意識層に沈下している。それらは普通、遺伝、学説、教育、環境の圧力によって、…ほとんど摩擦なしに伝達されていく。要するに、われわれがしばしば考えたり、感じたり、おこなったりすることは、個人や集団や事物において自動的なものとなり、われわれの意識的生活の負担を軽減するのである。以上のような点において、先祖代々または個人的にえられる莫大な力の節約は、もちろんわれわれの日常生活の負担を軽いものにするには十分ではなく、依然として日常生活の要求が平均人の生活のすべてを吸収してしまうこともある。このことは経済という特殊な日常生活にも妥当する。すなわち、慣行の領域の外に出ることはつねに困難をとめない、新しい要因を含むのであって、このような要因を内包し、このような要因をその本質とする現象こそまさに指導者活動にほかならないのである。」(222)

■ 慣行の外部にでる際の三つの困難

(1)【「知」の性質】：「経済主体が慣行の外に出ると、軌道の中では多くの場合非常に正確に知られていた、決断のための与件や行動のための規則がなくなってしまう」(223)。そもそも「計画がまず第一に練りだされなければならない。…この計画は慣行のそれに比べて、量的により大きな誤謬を含むばかりでなく、質的に異なった誤謬を含むのである。慣行の計画はわれわれがすでに見聞し体験した事物の観念についてはまったく明確な実在性をもっているが、新しい計画は単に想像されたものの観念にすぎない。」(223)

・「成果はすべて『洞察』にかかっている。それは事態がまだ確立されていない瞬間においてすら、その後明らかとなるような仕方事態を見通す能力」である(224)。「周到な準備工作や事実知識、知的理解の広さ、論理的分析の才能でさえ、場合によっては失敗の源泉となることもある。われわれが自然的、社会的環境を正確に知れば知るほど、また事実に対するわれわれの支配が完全になればなるほど、また時間の経過や合理化の進展にともなう、事物が簡単に計算され、しかも迅速かつ確実に計算されうる範囲が大きくなればなるほど、ほかならぬこの課題そのものの重要性はますます後退し、したがって『企業者』類型の重要性も低下せざるをえない。」(224-225)

(2)【**態度**】:「慣行の軌道が不適切なものになったり、もっと適切な新しいものがそれ自体まったく特別な困難を示さない場合においてすら、人々の考えは再び慣行の軌道に立ち返ってくるのである。」(225)「新結合の立案と完成のために必要な余地と時間を搾り出すためには、また新結合をたんなる夢や遊戯ではなく、実際に可能なものとみなしうるようにするためには、意志の新しい違った使い方が必要となってくる。このような精神的自由は、日常的必要をこえる大きな力の余剰を前提としており、それは独特なものであり、その性質上稀なものである。」(226)

(3)【**社会環境の抵抗**】:「この抵抗はまず第一に法律的にまたは政治的妨害物として現れる。しかしこの点を別にしても、社会集団の一員が他と異なる態度をとることはすべて非難的となる。」(226)「この抵抗を克服することは、つねに、生活の慣行軌道には存在しない特別の種類課題であり、また特別な種類の行動を必要とする課題でもある。」(227)→この点で「企業者」は、「指導者」としての活動を必要とする。

■ 「指導者」類型と企業者の関係

・「新しい可能性に対して、しかも新しい可能性に対してのみ、特殊な指導者課題が成立し、指導者類型が出現する。」(228-229)「指導者はそれ自身、新しい可能性を『発見』したり『創造』したりしない。新しい可能性はいつでも存在し、人々によってその日常の職業労働の過程において豊富に蓄積されており、またしばしば広く知られており、文筆家が存在する場合には宣伝もされているのである。しばしば、まさに生活にとって重要な可能性を洞察することは、けっしてむづかしいことではない。…指導者機能とはこれらのものを生きたもの、実在的なものにし、これを遂行することである。」(229)

・「指導者を特徴づけるものは、まず事物を見る特殊な方法であり——このさい再び注意すべき点は、これは知力を意味するのではなく(…)、むしろ確固たる事物をつかみ、その真相を見る意志と力を意味するということである——、またひとりで衆に先んじて進み、不確定なことや抵抗のあることを反対理由と感ぜない能力であり、さらに、…『権威』、『圧力』、『人を服従させる力』といった言葉で表すことのできる、他人への影響力である。」(230)

・【**共同経済における指導者**】:「企業者機能が、原始的遊牧民の首長や共産主義社会の中央機関…におけるように、より一般的な指導者的地位にともなう他の諸要素と不可分にかみあっていて、しかもその機能が一般的な強権的命令の実行に基礎をおいているかぎり、上述のことに付加して、なお次の二つの点を指摘すれば足りる。なぜわれわれは新結合の遂行に多くの力点をおき、新結合の『発見』や『発明』に力点をおかなかいかいまや明らかとなる。発明家あるいは一般に技術者の機能と企業者の機能とは一致しない。企業者は発明家でもありうるし、またその逆の場合もありうるが、しかしそれは原理的には偶然

にすぎない。企業者そのものは新結合の精神的創造者ではないし、発明家そのものは企業者でもその他の種類の指導者でもない。」(230-231)

・【私的経済における指導者】：「企業者機能が私的『実業家』のことがらである限り、それは経済生活を対象とするあらゆる種類の指導を包括しているものではない。各種の労働指導者や利益代表者もまた…経済的指導者でありうる。」(231)「…権威の重要性はより小さなものとなる。これに反して、視界の鋭さや偏狭さと独立独歩の能力との特殊な結びつきは、ますます重要性を増してくる。そしてこれが彼の類型をも決定する。この類型は、他の種類の指導者活動の場合と違って、指導者の前提である高い地位にともなうあらゆる外面的光彩を欠いている。この類型は、危機に面した社会階級において指導が「人格」や名望を通じておこなわれるような、他の多くの種類の指導者活動にともなうあらゆる人格的光彩を欠いている。その課題は非常に特殊なものであって、これを解決することのできる人は、他のあらゆる点で賢明であることも、魅力のあることも必要ではなく、また教養のあることも、なんらかの意味で『すぐれたもの』であることも必要ではない。」(232)「彼は典型的に…成り上がり者であり、なんらの伝統ももたず、したがって事務室の外にあっては、およそ指導者に似合わぬことだが、しばしば頼りなく、大勢順応的であり、神経質である。彼は経済界の革命児であり、——また意図せざる社会的、政治的革命の先駆者であり——、彼自身の仲間も彼より一步先んじているときには彼を拒否するために、しばしば既成の実業家の間では歓迎されないのである。」(232-233)

■ 快樂的利己主義（功利主義）に対する批判

・「一定の社会的環境——すなわち、一定の社会構造や生産組織、また与えられた文化状態——や社会的慣習や習俗のもとで経常的に行われていることは、経済主体にとってはなによりもまず広く一般に客観化されている義務の観点のもとに現れてくるのであって、けっして個人的な快樂的利己主義にしたがって合理的に選び出されたものとしては現れてこない。このような義務は超世俗的に方向づけられていることもあり、あるいは広範囲の社会集団（国家、民族、都市、階級）にそくして、あるいは血縁…、あるいは具体的な活動領域（農場、工場、商店、労働組合）にそくして方向づけられていることもある。」(237)

・企業者類型の場合、「たしかに、彼の動機はとりわけ利己的に——「高度の利己主義」とか傍若無人という意味においても——彩られている。すなわち、彼はなにしろまったく伝統も係累ももたず、あらゆる束縛を打破する真の原動力であり、自分の育った社会層や自分の参加する社会層の超個人的価値体系に対してまったく無縁のものである。とりわけ、彼は近代的人間や、個人を基礎とする資本主義的生活様式や、無趣味な思考様式や、功利主義哲学の先駆者であり——実にピフテキと理想とを求めて共通分母の上に並べる力と機縁とをもった頭脳ののち主である。そのうえ合理的…でもある。」(239-240)しかし、「われわれのこの類型の動機は本質的に異なった種類のものである。たとえわれわれが人間行為の快樂主義的解釈にしたがって、苦痛を避け快樂を求める意志をきわめて広く解釈して、あらゆる動機がこの図式の中に含まれるようにしたとしても、…なお本質的に異なるものである。彼の『経済的動機』すなわち財貨獲得の努力は、獲得された財貨の消費が与える快樂感に根ざすものではない。そして、この意味における欲望満足が経済活動の基準であるならば、われわれの類型の行動は一般的に非合理的であるか、さもなければ異なった種類の合理主義に属するものであろう。」(240)

・「典型的な企業者というものは、自分の引き受ける努力が十分な「享樂余剰」を約束するかどうかを問うものではない。彼は自分の行動の快樂的成果を気にかけない。彼は谷なすべきことを知らないために、たえまなく創造をする。彼は獲得したものを享樂して喜ぶために生活しているのではない。」(244)

■ 企業者の動機

(1) 「私的帝国を、また必ずしも必然的ではないが、多くの場合に自己の王朝を建設しようとする夢想と意志がそれである。」(245) 「この動機は、あるものにとっては『自由』と『人格の基礎』、あるものにとっては『勢力範囲』、あるものにとっては『えらがり[偉そうにすること]』というふうに表示ことができよう。」(246)

(2) 「次に、勝利者意志がある。一方において闘争意欲があり、他方において成功そのものための成功獲得意欲がある。」(246)

(3) 「最後に、創造の喜び」がある。「これは一方では行為そのものに対する喜びである。『単なる業主[事業経営者]』が一日の労働を辛うじて終えるのに対し、われわれの類型はつねに余力をもって他の活動領域と同じように経済的戦場を選び、変化と冒険とまさに困難そのものとのために、経済に変化を与え、経済の中に猪突猛進する。他方では、それはとくに仕事に対する喜び、新しい創造そのものに対する喜びである。…この場合にも、財貨獲得の『意味』を構成する根拠から、またこの根拠の法則に従って財貨が獲得されるのではない。」(247)

・「上述の三群の動機のうちで第一のものにおいてのみ、企業者活動の成果としての私有財産がその活動のための本質的要因となる。」(247)